





太和物語抄序

日本者新羅百濟之東南民物豐阜之神邦也

神武天皇都太<sup>和</sup>初栢原宮仍以倭為號猶曰

唐曰虞曰夏曰殷曰周范史曰太倭王居邪麻

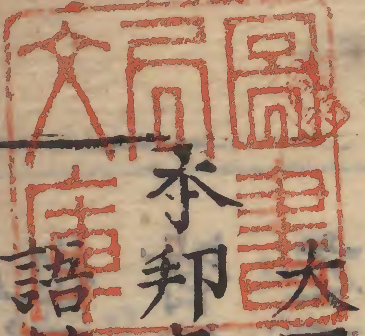
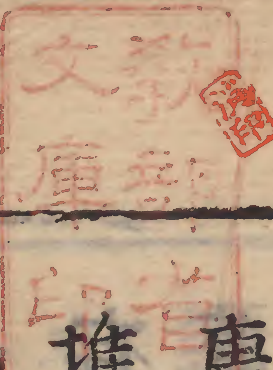
堆山止山迹之義亦通隋朝推古之使謂日出

處則取進陽谷之義也唐咸亨初更號日本曰

大曰盛曰皇者國之美稱也

本邦之俗採善言美辭曰物語比之於嘉話叢話

語林談苑俞矣夫太和物語者花山帝之所製





也或曰在原滋春之所撰也和歌百八十餘首  
皆論其人正其事述其物記其語良有以前事  
之不忘後世之元龜也橘良利之隨宇多帝之  
山林聖武帝之答人麻呂之風詠者君臣之道  
存戒仙之哭父遍昭之思子者非父子之義乎  
蘆屋之女尋男葛城之妻思夫者夫婦之道至  
矣延喜帝之呈菊濟院嵯峨院之獻蘭平城帝  
者兄弟之倫具矣源公忠之贈歌小野好古堤  
兼輔之惜別大江千古者朋友之信盡矣實挹  
難波敷嶋之遺流者誰敢不喜尚矣家父高弟  
北村氏慮菴仁術之暇寓心歌林有年于茲方  
今讀京極黃門之題書而據此書之典故爲之  
註解也空柯無及則公翰不能以斲詎爲宋人  
之遇周客乎雖有玩物喪志之警閱蒙振落則  
其功復不爲不多請予作序予單淺之士匪閔  
此物語啻序此抄而已讀者辨焉

昭陽大荒落如月日

洛陽後學源杏僊泮  
毫于小廬堂之墨池







傳るに。遠春乃の書りとほごめん事なむつを  
し。これものむり書らちじ。在次ミタ君ミキとさき書  
の甲斐ウチのくりにて。母ハハとて。かきつめれゆ  
きつひちとぶおもひ。こもよ知りし事なま。  
古今集にもさきく。まごもるづ。母ハハのこらよ  
とつひをさつるす。いへ傳る。まのあまさばいひさう  
あひ傳る。一条。福岡は所れ。多林良我集よ。偏イタ小  
花山院乃やま。と物治と。かやま。ころ。いり  
故あきつり。い傳りしと。き。さう。も。傳れ。又。ば  
まのころりよ。さび。ま。の。乃。は。時。ま。い。傳。人。乃  
う。た。ま。り。つ。り。て。ま。え。傳。り。づ。ま。ひ。う。つ。に。ま。ひ

傳るに。遠喜乃の書らま。ま。と。ま。も。古。人。乃。伝。れ。  
ひ。ま。ま。ま。徑。く。さ。乃。も。物。が。ち。り。を。業。事。乃  
物。乃。乃。自。記。も。も。乃。乃。の。事。乃。も。も。乃。乃。  
ま。く。ま。ま。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。  
又。伊。勢。乃。の。つ。り。く。ま。く。伊。勢。乃。の。つ。り。と。ま。  
は。け。く。り。と。乃。乃。諸。説。乃。決。一。傳。れ。は。も。乃。乃。乃。  
乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。  
に。又。彼。乃。乃。の。製。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。  
補。ひ。た。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。  
乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。  
乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。乃。















らあむれは御のよきもすし一後園抄基後他り  
あむれは御のよきもすし一後園抄基後他り  
あむれは御のよきもすし一後園抄基後他り  
あむれは御のよきもすし一後園抄基後他り

*[Faint, mostly illegible handwritten text]*

亭子院トウシノイノ乃この也。宇多天皇也。是孝才三。御諱定者。

御母皇后班子。二品式下中野親王女。

拾芥抄云。亭子院テイシノイノ七条坊門小南。西洞院西二町。

寛平法皇ウタヒ御所モト元東七條右皇温子家。

宇多乃この也。此讓位乃ち此亭子院。

松平乃この也。此讓位乃ち此亭子院。

宇多乃この也。此讓位乃ち此亭子院。

ありのよきもすし一後園抄基後他り

と云。宇多帝。寛平九年七月讓位。

弘徽殿乃この也。此讓位乃ち此亭子院。

弘徽殿乃この也。此讓位乃ち此亭子院。



















為客夕蛩邊有夢到家多下畧此詩乃韻を次  
 又黃山谷五更歸夢常ニ苦短一寸客愁無ナシ  
 多キモラ慈母每占ツキニ烏鵲喜家人應賦モイ廢廢歌ト化  
 まりかろやまト乃所ハひをシふシあるコト  
 わざあつしつハおのハじきハかろひハゆるヨや  
 とあつしつハよハもハちもハそハえハもハ成ハ成ハなり  
 ころあをハんハ實ハ蓮ハたハくハとハひハはハまハぐハもハは  
 けニ源ハ大納言ハ宰相ハりハたハりハくハるハ時  
 清蔭大納言正三位陽成院ハ子母紀氏号ハ紀君  
 贈源姓ハ天曆四年七月三日薨ハ拾遺集ハ他  
 けニ源ハ大納言ハ宰相ハりハたハりハくハるハ時  
 清蔭大納言正三位陽成院ハ子母紀氏号ハ紀君  
 贈源姓ハ天曆四年七月三日薨ハ拾遺集ハ他

者也故の字んげやしへの名にカしハるハ也  
 京極乃ハもハとハんハあハりハ亭子院ハのハ所ハ於ハつハるハ  
 ずハりハまハもハとハくハずハおハろハひハをハるハんハせんハとハあハふ  
 内ハもハ物ハ一ハえハごハ二ハえハごハせハさハもハくハまハとハきハこハえ  
 ぬハふハふハふハ  
勘物云  
 京極のハもハとハんハあハりハ藤原子本院左大臣時平公女  
 字ハあハりハとハおハりハあハらハちハはハ院ハへハあハるハ也  
 雅明親王載明親ハまハもハとハくハずハりハ  
 亭子院ハのハ所ハ於ハつハるハ拾遺集ハ云ハてハ長ハ四ハ月ハ廿  
 八日ハ法皇ハ六十ハ乃ハ所ハ於ハつハるハ京極乃ハ所ハ於ハつハるハ  
 まハりハくハるハもハとハあハりハ愛ハくハ家集ハもハ同ハく







新場の事ハ...  
事を源太納言...  
これもの...  
のちハ...  
で...  
セウ...  
ウ...  
ヒ...  
東西...  
...

六ノヤ...

カ...  
時...  
カ...  
事...  
...  
...  
...  
...  
...  
...



きとり事とて柳乃志あひのせむは  
花の冠がさきをうたの志あひ三尺六寸なりと  
とりはごらもにますこたきあがりて  
こもあつてつらきまはれうつくしあはれは自  
あはれあひまはらまはれしと何りチバ催馬  
樂しき柳の志あひをまはれとも何り柳  
あがりあひまはらまはれしに梁菴愚案抄註  
まがりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ

あをきさういしうちたてのどろり  
らうりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ  
まのりあひまはらまはれしに柳乃志あひ











あつとせ何とせと子つて人乃戰場よたも  
しきとど天下に芳あまのりをこめてとあふ  
心も何とせやけあは撰入侍り又和漢朗詠  
集公任撰將軍と子孫の志とつて少と  
しやあたまぬ乃うこあまつまけは心の心を清く  
これをもてわがりちこりちてまんまきけ  
お空位りちぬよー何とせとてとてわが  
むわりのまもる。

愚案。後撰集より好吉れぬ一何りおけを  
つてあまの玉匣はれはうにぬれぬなり  
お双成にはつてうろ病除月うつとこえぬの家

前坊せんぼうのききうせのひよくれは天補てんぽのきき  
あつとせ何とせと子つて人乃戰場よたも  
しきとど天下に芳あまのりをこめてとあふ  
心も何とせやけあは撰入侍り又和漢朗詠  
集公任撰將軍と子孫の志とつて少と  
しやあたまぬ乃うこあまつまけは心の心を清く  
これをもてわがりちこりちてまんまきけ  
お空位りちぬよー何とせとてとてわが  
むわりのまもる。

前坊せんぼうのきき。坊とハ東宮坊也。前とらふ字ん。  
こあまのくれさあつとせのひよくれは天補のきき  
あつとせ何とせと子つて人乃戰場よたも  
しきとど天下に芳あまのりをこめてとあふ  
心も何とせやけあは撰入侍り又和漢朗詠  
集公任撰將軍と子孫の志とつて少と  
しやあたまぬ乃うこあまつまけは心の心を清く  
これをもてわがりちこりちてまんまきけ  
お空位りちぬよー何とせとてとてわが  
むわりのまもる。

子ト延長三年六月十八日皇太子薨五歳同年十月  
十一日立實明親王ヲ爲皇太子母中宮穗子同文彦太子  
子ト延長三年六月十八日皇太子薨五歳同年十月  
十一日立實明親王ヲ爲皇太子母中宮穗子同文彦太子







玉しつとあへ下敷とくしげ女をこ引ぐし故  
船も舟も氣もあつてさつとく走原氏定輝  
のいよれ女もぐりしりしうあおを切りて  
なつちりもさつとくしよるいよれひし  
傳れはげ候のそいをもては案武部もかきよ  
くごりやちつとくしよるいよれ  
ちつとくしよるいよれ  
あ文字ハしよるいよれ  
下其向えちつとくしよるいよれ  
きとらあつとくしよるいよれ  
しよるいよれ

とあへ下敷とくしげ女をこ引ぐし故  
男女あひまはしよるいよれ  
てなつちりもさつとくしよるいよれ  
よあへ下敷とくしげ女をこ引ぐし故  
いよれ  
たもさ女 ちつとくしよるいよれ  
北行勘也撰集代後人不知乃しよるいよれ  
つとくしよるいよれ  
あつとくしよるいよれ  
あつとくしよるいよれ  
あつとくしよるいよれ







おのりしつゝいふもあつていふもあつていふもあつて  
まじり又いふもあつていふもあつていふもあつて  
うらむいふもあつていふもあつていふもあつて  
かゝりていふもあつていふもあつていふもあつて  
とあるはこれかゝりていふもあつていふもあつて  
あんかやいふもあつていふもあつていふもあつて

おのりしつゝいふもあつていふもあつていふもあつて  
かゝりていふもあつていふもあつていふもあつて  
おのりしつゝいふもあつていふもあつていふもあつて  
かゝりていふもあつていふもあつていふもあつて  
おのりしつゝいふもあつていふもあつていふもあつて  
かゝりていふもあつていふもあつていふもあつて

おのりしつゝいふもあつていふもあつていふもあつて  
かゝりていふもあつていふもあつていふもあつて  
おのりしつゝいふもあつていふもあつていふもあつて  
かゝりていふもあつていふもあつていふもあつて  
おのりしつゝいふもあつていふもあつていふもあつて  
かゝりていふもあつていふもあつていふもあつて

延長五年九月七日薨  
母同延喜帝  
内大臣高藤女







えめりてよまらるる前住部のしぬ  
監の命ぬせりありたる家を人よりりて  
のちのちをいふとていふありしきかゝるにうの家  
乃ち人をいふとていふありしきかゝるにうの家  
城よりありたる家。新居川のつらまはし  
のちをいふとていふありしきかゝるにうの家  
ゆゑにあり。愚案よ。伊勢此との家の盛双紙  
云法輔能因法師兼房車の後よ。兼房  
に二条東洞院より。後よ下て教町歩ゆせり。  
兼房ありて問う。能因答云。伊勢御家  
跡也。彼所前裁の殖去いふに傳りつる。

のりありて下りていふとていふありしきかゝるにうの家  
新居今に因坊内傳のちをいふとていふありしきかゝるにうの家  
わきはくのきされ。愚案よ。伊勢此との家の盛双紙  
とていふとていふありしきかゝるにうの家  
内傳れよ。是はくのきなり。愚案よ。伊勢此との家の盛双紙  
は冷泉堀川なり。おとあるとていふありしきかゝるにうの家  
里栗田口よ。まわらりていふとていふありしきかゝるにうの家  
り。いふとていふありしきかゝるにうの家  
あちをいふとていふありしきかゝるにうの家  
けうとていふありしきかゝるにうの家



























とくまのりいひい少将のまゝまぬ所由をい  
めし風いし

が将之

ちる北野にたひいさうおりふされ孝

つしきおれい

古今にわかれ孝河をうい

人乃てしりりともえさるまよけい

故式部の名也此は羽の名也

こころもいふれいこのち母すまに

やういりくれい少将

故式部の名也

敦慶親王

宇多帝皇子女同延喜帝

二品式部の号玉光宮延長八年二月廿八日薨

出羽乃こをいしやれ友女も

秋風いさびくおだま

いさよまおてい

が将のういし古今秋の北孝の杖うたすき

か子出さすめく神いんげい

い少将のういしをもるは信れ八能信狂信

いそたれい

いさよいもまのいしす秋をを

いひくたをれい

わがわらうり文をもり



此のころにひらきあはるるは、  
おのれはあすすまきとて、能別れのちかれい  
故或<sup>のち</sup>や二條れとあり、終りて又此れは  
ひらき、七日のひらきなり、まづり終り  
二條れとあり、三條れは長定の方女也、異なり  
二位のちやとあり、又の條れは、  
あつた、此れは、  
きり、梅の花は、  
ひらき、  
は、  
あ、  
あ、  
あ、

七種乃菜を、これを、  
して、やまひ、  
七種、  
す、  
あり、  
蓬、  
寮、  
て、  
公事、  
式、  
あ、











とおのりしるまゝにまればやうにわが身はゆるぎ  
 けりし事もまじうにまじはれは御月よ  
 久しかりしに月ハつらきまよひも  
 又とゆるし事ハまじはれしに  
 ても内おらば。後撰しあつたれ  
 ましきまじはれしに。又の口  
 さらしるまゝにまじはれしに  
 さらしるまゝにまじはれしに  
 とらんあつたれ  
 良少将と書乃休あつたりたるらる。監命あつたぬん  
 すまじはれしにまじはれしに

良少将一字不違存云 良峯儀 承平六  
 年右少将天慶三年冠人ハ中將天曆元  
 平云云この物あつたりたるらる。監命あつたぬん  
 字貞也 はな遍昭 あつたりたるらる。監命あつたぬん  
 カんぎの森れ志あつたりたるらる。監命あつたぬん  
 奥義抄八中將抄もに。良峯儀名をカ  
 と伝ひ。内書ハいふにも。柏木をいふ少将り  
 ありし事もまじうにまじはれは御月よ  
 さらしるまゝにまじはれしに  
 さらしるまゝにまじはれしに



もあーいのちきりより監命ゆれよあるよ也

かゝるもろりもりれきこもておひれん

くおおひのこあーいさうおひよ

目たさうにあさすはあらんといふを慰め

てせよよあまのこあれいさういさうよ

いさうあまのこあれいさういさういさう

髪より白うまのこあれいさういさういさう

えがもえすよとよあまのこあれいさういさう

ももんりいさういさういさういさう

らあ将<sup>大</sup>あれ<sup>備</sup>たうすきかあれいさういさう

監命ゆれよあるよとていさういさういさう  
いさういさういさういさういさう

いさういさういさういさういさういさう

の物とらあまのこあれいさういさういさう

いさういさういさういさういさういさう

あざん乃このあまのこあれいさういさう

いさういさういさういさういさういさう

このあまのこあれいさういさういさういさう

あまのこあれいさういさういさういさう

いさういさういさういさういさういさう

のあまのこあれいさういさういさういさう











多々るにたゞしき事ありて可くは

袋草紙法華地之帝ハ延喜乃御宇也

ゆりけおたけりておちく不醍醐乃帝を也帝

とあり。又他の事ありて傳れはさしあきも傳

し。有臣乃女侍勅多能子イサ三条右府之女。

漢朝より八十一女御とあり日本少の誰畧

天皇御時ヲヒミ稚媛とあり女御と吉備山道女あり。

うハ代はつるの禁秘抄云号藤壺上御局ミツナ后女御

更衣ミヤコ參上所也近代為御所又云上御局号弘徽殿御局

是御行ミヤコナド有所也其御更衣可參上ミヤコとあり。

とハヒとあり傳ゆる事ハ天皇を傳かす也

しりしにきこむるやもれりもさす

とありともさするもたれす也

又文字後日ありて河に狹衣了日くしミヤコ

ありともありともさするもたれす也

をさするもたれす也

とあり。拾遺集ありてあり

とありともさするも

ひえ乃やまのねんぐ御子とありし御子のやま

とありともさするも

大徳乃とありともさするも







いそぎもあつて人のきつてに

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

註しいそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

人のうらひおもしろき事をもなほし下署 愚案に

このうらひあがり候りあはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇

いそぎもあつて集り候人あはれとて入侍り宗祇



すゝゝゝ。ちりり。發憤と云人を止るゝ  
と云りり。おやと云り。親兄弟の御  
事。すゝゝゝ。他より。すゝゝゝ。すゝゝゝ。  
すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。  
すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。  
すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。  
すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。  
すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。  
すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。  
すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。すゝゝゝ。

よゝゝ。人れちり。乃兵衛作。うゝゝゝ。ゝゝゝ。此秋  
り。ゝゝゝ。これの。あう。ま。り。ゝゝゝ。ゝゝゝ。酒の  
あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。  
あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。  
あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。  
あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。  
あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。  
あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。  
あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。  
あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。  
あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。ゝゝゝ。あゝゝ。







しやうおのりし

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ

しやうおのりしはるるよるれきく西路ハ



あけぬれりハ紅梅と申は月あかりの  
花初りひひけり清和親長と云ふ  
あけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
梅のあけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
催すあけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
てまはともあり。葉花あけぬれりハ  
あけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
け物あけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
とろもあけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
海花あけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
あけぬれりハ梅のあけぬれりハ

くちあけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
あけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
あけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
あけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
あけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
あけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
あけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
あけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
あけぬれりハ梅のあけぬれりハ  
あけぬれりハ梅のあけぬれりハ







わがみ帝乃宮おかれせむを孫引居り  
しむるともほや

しむの院よもてとてまのり

躬恒 古傳云先祖之兄。祇註云躬氏孫湛刺男

多。又甲斐小月良高子。愚案日本紀神代

上天津彦根命是凡川内直山代直等祖也。

抄云。宣賢 凡川内氏也。直姓也。古今集作者躬恒祖

神也。延喜七年正月十三日任丹波權小月後淡

路掾。又古今序前甲斐小月。院八字多帝也。

しむの院よもてとてまのり

しむの院よもてとてまのり

とてまのりしむの院よもてとてまのり

わがみ帝乃宮おかれせむを孫引居り

しむるともほや

しむの院よもてとてまのり

しむの院よもてとてまのり

しむの院よもてとてまのり

しむの院よもてとてまのり

しむの院よもてとてまのり

しむの院よもてとてまのり

しむの院よもてとてまのり

しむの院よもてとてまのり















よと後、甲の侍りなきき、あつあけしと、  
之をあつあけしと、あつあけしと、  
乃後、甲の侍りなきき、あつあけしと、  
之をあつあけしと、あつあけしと、  
つと、あつあけしと、あつあけしと、  
伊勢のきき、あつあけしと、あつあけしと、  
中将のきき、あつあけしと、あつあけしと、

伊勢のきき、あつあけしと、あつあけしと、

勘云源正明承平四年十二月右  
中将南院式部卿是忠親主男天慶八年在中  
将五年参議云々正明異本に忠明と云々

つと、あつあけしと、あつあけしと、  
か、あつあけしと、あつあけしと、  
う、あつあけしと、あつあけしと、  
あ、あつあけしと、あつあけしと、

中、あつあけしと、あつあけしと、  
却、あつあけしと、あつあけしと、  
乃、あつあけしと、あつあけしと、  
あ、あつあけしと、あつあけしと、  
し、あつあけしと、あつあけしと、  
子、あつあけしと、あつあけしと、



























らをおりよもらうとぞいぬるかな

後撰集あり入侍り不可説乃うらまはせ

先帝にてあをれりたがやうきりたり後

の會もありたきとくえしす

平仲のんぬんのごうとてのち所へてあ

ひよりたりはれしのちりひとをさし

平仲 平貞文字仲因号右中將平好風男好風中野親

まゝ孫茂世子 閑院のい。古今作名。或説宗子女也。

うらとけてききえぬらんわさハし

あのにきおてこひりたり

わさつらもとりよとにぬさの中務事

あましのいもさるりけれはやとくねん

とんちあやう

しるさあつたきううこれをとひつん

わさつらもとりよとにぬさの中務事

きつたもすともひりたりはれし

わが事とハきうらもすし

おひたる男も侍りつられ

とをいひつけられたる

よをえし。やうにたきあ

くあらんるおまのりたけ神

陽成院乃一葉れき



おくやまだにうらをいれくうのふん

うきいもぢれりりなきわしや

おくやまだにうらをいれくうのふん

足希乃侍もき刑部之悪くはくひまふ

がる更衣乃里よりすよりりりてあつてひまふ

まのりしきもはりりきよよつうそく

刑部のきこしり更衣乃くあて更衣と天子

の便殿より侍りしは衣をぬきあつてあ

て仁の帝の時時よりきよまのりりきよ

くうにも侍り容齋隨筆九云雅志堂後小室名

之曰更衣又云灌丈傳坐乃起更衣顔師古註更衣也

凡父坐皆起更衣以其寒暖或変也又云衛皇后傳

帝起更衣子丈侍尚衣云のまこの刑部のきこ

未初服。里よりすよりり出とハ禁中を退出こいりす

也。桐壺をいもの心あつく里のちあるをい

よくあつてあをいれある物うおしりしとを

おろぐをわさるるはれげられや

よるにのうしりのぞりるん

帝たんのひまつくあつて更衣しつてあ

り里よりすよりりあつてあつてあ

古今より八亭子院の法製衣と侍り

とあつてあつてあつてあつてあ



はく

母院のまことこれハ延喜式に於てのや。新皇と云ハ  
ちしめ此帝を皇子院とありしをさしりて  
き歟。考帝王系圖字多ク皇女乃中よりハ君子肉  
親王をさす乃母院也。延喜式才六云凡天皇即位  
者定賀茂太神宮祿麻王内親王未嫁者卜定若無  
内親王者依世次簡諸王女卜定云云。考此母院の  
ちしめたるまことや。嵯峨のまこと平城乃帝と  
此位をあらうる也。多ひし時此がれとて此位  
しめは皇女を皇子内親王をさしりて母院  
と云ひしと云。土御門院之久え後三平四代乃

母院よりつりて断絶し傳とるや

ゆきつりし無人乃しめしとありしをさす

これのちしめしわがやどれき

こまきくきりしを無とす。また文字よりや

又母院をあらうるや。帝は此位

ては自らしゆりてんまのちしめし

ありぬとす。また守りてんまのちしめし

わがやどれしをあらうるや

よるもきく乃ちしめしをあらうるや











とてきりたり

<sup>博</sup>様

博奕也。孟子云博奕好飲酒不顧父母之

養二不孝也。又或説小人とるを切て供養は

て佛なるを帰く求る人。賤室妻のをも下

去て為常の人。厭れ佛の事も所事ハ

此道ハ是の向ん方と云ふも多分世幻也と推果

つる人。何れ心をもちひてつらちゆんともお

もひ侍らん。さうはうすうすうとらうや

とてきりたり。ゆきまればかりうあれ

のちちねばかあり。とてきりたり

歸らち。とてきりたり。まきれ技をわらひ

とてきりたり。まきれ技をわらひ

とてきりたり。まきれ技をわらひ

とてきりたり。まきれ技をわらひ

とてきりたり。まきれ技をわらひ

とてきりたり。まきれ技をわらひ

とてきりたり。まきれ技をわらひ

とてきりたり。まきれ技をわらひ

とてきりたり。まきれ技をわらひ

とてきりたり。まきれ技をわらひ

とてきりたり。まきれ技をわらひ

とてきりたり。まきれ技をわらひ







つきのうをたやあけりてのちとくをまね  
てんりくすしたうあひあひすもあまを  
らして兼登りていささかりたり。

中真 島伝昌泰元季藏人。延喜三季大内記四季  
任近江守後左衛門權作。ひとめをいささかづ  
けおぼる乃あひも。いささかあまもあひかづ  
いささかあひあひいささかあひいさ  
あつんとあひあひいささかあひいさ  
あつておちあひいささかあひいさ

絶代有佳人。幽居在空谷。  
谷自云良家子。零落依草木。杜子美作也。似

侍

おちあひいささかあひいさ  
いささかあひいささかあひいさ

いささかあひいささかあひいさ  
いささかあひいささかあひいさ  
いささかあひいささかあひいさ  
いささかあひいささかあひいさ  
いささかあひいささかあひいさ  
いささかあひいささかあひいさ  
いささかあひいささかあひいさ  
いささかあひいささかあひいさ  
いささかあひいささかあひいさ  
いささかあひいささかあひいさ



















































































つらまきり一夏のうきあをこりずい文強きんこ  
宇多院乃花松もありきり南院乃さきいぶ  
うられくれあつまりてうきあをこりずい文強きんこ  
かしのゆき

宇多院 拾菴云西京土御門北木辻東此小路當法  
東洞院  
皇御所刑部卿源湛宅云或杜云西京宇多小路  
但此小路當町尻東行南院のききり今案  
前乃宇多勅物是忠親王男と三光院西丹法院を  
玉代系圖よりあはれゆりしとけ候乃さきいぶ  
ゆきり宇多のききり南院乃西丹法院  
ききりいれどゆきりすあはれゆり

ひーあー乃花松もありきり南院乃さきいぶ  
宇多院乃花松もありきり南院乃さきいぶ  
多院崩御乃花松もありきり南院乃さきいぶ  
らも人乃さきいぶ

季繩乃少將のむとめ右近板さけのらやよけ  
しひきり比故撞中納言のききりたりきり  
ききりあはれゆりすあはれゆり  
里きりさきいぶさきいぶ  
肉わさり乃人ききりさきいぶ  
やとさきいぶさきいぶ  
ハ所文さきいぶ















けりしは萩乃やけしうかきわげん  
わつまつまんとしれをさうりまん  
萩乃やけしうかきわげのうり  
さうりまんしれをさうりまん  
のうりまんしれをさうりまん  
とよしうりなれはあましくめしうり  
かこ島しりわびもさうりまん  
さうりやうやわつまつま  
は萩乃やけしうかきわげのうり  
さうりまんしれをさうりまん  
のうりまんしれをさうりまん  
とよしうりなれはあましくめしうり  
かこ島しりわびもさうりまん  
さうりやうやわつまつま

景をよるり。萩ハナニ程の中より色傳れの後  
より色傳る物。此ハわつまつまの對しなり。  
こもれあしうかきわげのうり  
か乃玉ありたる女をさうりまん  
のうりまんしれをさうりまん  
共庫乃のうり  
さうりまんしれをさうりまん  
ゆきほろりしうかきわげのうり  
雪をさうりまんしれをさうりまん  
さうりまんしれをさうりまん  
えんしうかきわげのうり



とつひりもれん

おまはるゝあはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに

あはれまゝに



うりたれハ

修理のきき 勘云内近允藤真行女と拾遺の

修考しゆ せいのりり 関

これちちああららししももああららししががああららししバ

ううららししももああららししががああららししバ

ああままりりああららししががああららししががああららししが

ひひままととああららししががああららししががああららししが

かかららああららししががああららししががああららししが

いいららししががああららししががああららししが

ああららししががああららししががああららししが

女女のの身身をを拾拾遺遺すす入入信信御御奉奉にに花花人人ああららししハ

くくららししががああららししががああららししが

ああららししががああららししががああららししが

少少勇勇代代細細代代よよららししががああららししが

ととららししががああららししが

ああららししががああららししががああららししが

ああららししががああららししががああららししが

ひひままととああららししががああららししが

ととららししががああららししががああららししが

ああららししががああららししががああららししが

つつととああららししががああららししが

ああららししががああららししががああららししが











ちきひもよもつられちきりなりし  
物んともて深孝王乃 漢文帝子 脩竹菴乃よ  
おのより親まを行乃そのふとせし  
わよもるよや 脩竹菴の在史記孝王世家註  
つまに葉に云具竹ん葉おろく河竹ハ世後  
清溝らちきハ河へけ仁妻後のこよより  
らきこるハれひりりこ

三糸乃ちれおと中梅りつをすづりくる時  
まうり乃ほつひりれそつしちり  
かよいもよる芳り終しえつく成よるい  
おのちんぞいあまいしりけ  
おをちんしうてんちれなひも  
多とつひやまりりり何る女成んが  
よとてよもんとおくもまも  
きよとあまののあまい  
しよとせりひま  
か

三糸乃ちれ 之く方也。島云延喜六年二月在



将。九年四月参議。中将如元。少将乃。公事根源云。未日。上陣。六府をめぐりて。警固の作。と。當日乃。近中少将。と。女と中將。一。月。使。の。焼。也。

女乃。扇。也。中將抄云。た。の。顯。云昔ハ扇を。愚案。扇。云。宣。中將。花。す。り。袴。を。























とや乃侍母

すまひもとおもひてしれと

あひあふくもしりもさきか

ふひあふくもしりもさきか

しりあふくもしりもさきか

のまひりもしりもさきか

とまひりもしりもさきか

まひりもしりもさきか

成りぬる武部とのやんす

うまもをいふもえんた

る。武家の所もといふは

あつてのや 敦實親王 すまひ皇子 女室は内と

と 柔子内親王 すまひ皇女 あつてははは姉

とやまへり侍あり書はあつて

まひりもしりもさきか

は撰集けうの御ちよ武部

いふもあつたりもさきか

たれはいふもさきか

いふもさきか

いふもさきか

いふもさきか

いふもさきか

いふもさきか

いふもさきか











何り勅云寛平皇女源氏傾子母菅丞相女と云は  
しるは母の妻家あれはすまじくは君とすまは  
亭子乃りしと云はははせうしと云は是のよき  
ゆははせうしと云はははせうしと云は是のよき  
すうしと云はははせうしと云は是のよき  
まの院乃はせうしと云はははせうしと云は是のよき  
ゆははせうしと云はははせうしと云は是のよき  
まの院乃はせうしと云はははせうしと云は是のよき  
ゆははせうしと云はははせうしと云は是のよき

寛平は皇當今(陸)色  
乃のとりとら奏せよ移りて  
つらゆははせ(禁)意(女)旨(女)たりしと云は勅云

貞信公昌泰三年正月廿八日自參議二千云云云の事  
七条右宮温子。寛平之后。昭宣公之女貞信公之姉。貞信公は后

宮へは院乃はせうしと云はははせうしと云は是のよき  
ゆははせうしと云はははせうしと云は是のよき  
まの院乃はせうしと云はははせうしと云は是のよき  
ゆははせうしと云はははせうしと云は是のよき

服をぬくはあきん事と出とせしと上  
の句。衣袴の事。ははせうしと云はははせうしと云は是のよき  
まの院乃はせうしと云はははせうしと云は是のよき  
ゆははせうしと云はははせうしと云は是のよき  
まの院乃はせうしと云はははせうしと云は是のよき  
ゆははせうしと云はははせうしと云は是のよき











古亭より掃法友の川をくわくの山吹ちり  
にたりつねにのりにあそぶ物をこぼすこの  
もやうな事繩乃よきるよや

とあやふれはうさうあをれりりあやうさうま  
もーすえらんはらんーくさ  
い帝りまはれ時より。もーうぬの院まや  
さうのあ好やまひはまはらうあうひしてすじ  
まらうらうらうらにすつりくろりり。まはらう公  
忠れきく掃部助として花人ちりくろりら成たり  
すす下さうらして。念の字がひのあやとあうらり  
あり。あおはる公忠のまられとけとくくくと勘云

延喜十一年三月昇殿十八年正月掃部助三月藏  
人。廿一年修理亮。延長二年正月五位。三年十月内藏  
助。六年正月藏人。民部少輔。七年正月左少辨。平治  
承平三年轉右中辨。

このつらりれすげあひてつひくまらうらりこ  
こらいたすくまらうらうらねとまらうらうら  
ちくづれれらんまらうらうら。のちまらうらね  
まらうらうらひすうらうらあまらうらうららん  
よまらうらうらしあまらうらまらうらうら。三  
月まらうらうらうら少將のまらうらうらまらうら  
うらうらまらうら















よある。ふさふさしたくちりたる。ちりたる。おとこの。おとこの。

はまの。右宮は。はまの。はまの。

の。の。の。の。の。の。の。の。

し。し。し。し。し。し。し。し。

わ。わ。わ。わ。わ。わ。わ。わ。

の。の。の。の。の。の。の。の。

の。の。の。の。の。の。の。の。

と。と。と。と。と。と。と。と。

の。の。の。の。の。の。の。の。

の。の。の。の。の。の。の。の。

の。の。の。の。の。の。の。の。

の。の。の。の。の。の。の。の。

の。の。の。の。の。の。の。の。

の。の。の。の。の。の。の。の。

の。の。の。の。の。の。の。の。

の。の。の。の。の。の。の。の。

の。の。の。の。の。の。の。の。

の。の。の。の。の。の。の。の。











いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

かゝるにやうな事件はあひくつとありし人なれば

おひきまゝにたゞしきこと

半ばしきりしやうな事なれば

おひきまゝにたゞしきこと

まゝにたゞしきこと

おひきまゝにたゞしきこと

まゝにたゞしきこと

にたりしやうな事なれば

とすまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと

いひまゝにたゞしきこと



























いふはまのくさしき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇

いふはまのくさしき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇  
しき事なりまはるる程古今程奇











これこそ...  
あま...  
と...  
せ...  
と...  
習坎...  
つ...  
定...  
ま...  
辨...  
と...  
井...

これこそ...  
あま...  
と...  
せ...  
と...  
習坎...  
つ...  
定...  
ま...  
辨...  
と...  
井...

五

あま...  
と...  
せ...  
と...  
習坎...  
つ...  
定...  
ま...  
辨...  
と...  
井...







あつし中絶せしむるはなればはなれば  
あつし中絶せしむるはなればはなれば  
あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば

あつし中絶せしむるはなればはなれば















衛風習之谷風以陰以雨と傳り。為はよりの

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。

よもあらししをいふ。よもあらししをいふ。



きりみで... 又新勅撰...  
修習寮の... 山あひ...  
け物... 中...  
よう...  
およ...  
ひ...  
め...  
す...  
き...  
ま...  
ま...  
ま...  
ま...

源... 花...  
き... 花...  
ま...

ひとり... 一人...  
お...  
わ...  
ま...  
ま...  
ま...  
ま...  
ま...  
ま...  
ま...











ありしに... 越中... 藤真樹... 延喜十年正月藏人兵部丞十二年  
式部丞十三年 劔十二月刑部少輔 彈正忠保生男 右大臣是公後  
あつとをさしやまんともや... 病をさすや...

とりりたれは... 死出たり... 事やありえん... ありしに...  
あつとをさしやまんともや... 病をさすや...  
あつとをさしやまんともや... 病をさすや...



とて無むをばりあきくくはし

中つあひあきとりしわひのまゝ人といふはこれ信

しき彩少いふは音をもはやにまてつてく

子屋し。又信くあきくけの音とてあや後る詞と

わらひまて

あつらまのあきめれまにまてしと

とりよりあきれあきせはりまて

とて無むをばりあきくくはし

あきくたといふ大臣よりあきくくはし

あきくたといふ大臣よりあきくくはし

あきくたといふ大臣よりあきくくはし

ひし。あきくたといふ梅をわたりてあきくくはし

あきくたといふ勸云貞信公延喜十四年八月二十五日

右大臣右大將如元。延長二年正月二十二日左大臣左大將。八年

撰政承平六年八月太政大臣。枇杷のあきくくハ勸云

仲平承平三年二月十三日右大臣左大將五十九。同六年七十一

正月十日左大臣六十三。天慶八年九月一日出家七十一。

大鏡云左大臣仲平七十一けあきくくこれをもつて此次郎

信母く本院の大臣時平よりあきくく大臣は信母

ナニとあきくたといふ枇杷のあきくくはし

あきく集あり。あきくあきく人よりあきくくはし

あきくあきくあきくあきくあきくあきくあきくあきく



清見よりわたりて... 梅の花  
... 仲平乃...  
... 女侍や...

延喜。勅云。栗子。寛平皇女母同。延喜。二年八月四日薨。六十一歳。けいおのしとめれぬ...  
... 昭宣公 基經 乃...  
... 女侍や...



















































先帝乃... 公忠... 一本ニ公忠  
あつぬをよもも... 公忠  
うらみ... 公忠  
かきわ... 公忠  
りきわ... 公忠  
をき... 公忠  
とあ... 公忠  
ま... 公忠  
あ... 公忠  
ま... 公忠  
か... 公忠  
か... 公忠

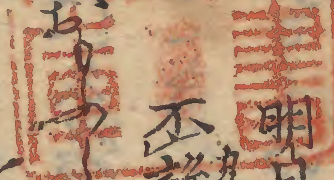
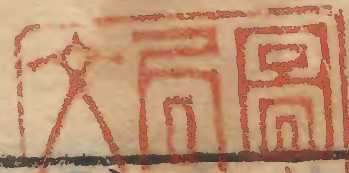
月をゆ... 日本紀云... 尊纂疏云...  
弦也。弦月半之名。七八日爲上弦。二十三、四日爲下弦。  
毛詩孔安國註。八九日月。体半昏。而中似弓之張。而  
弦直。謂之上弦。云云。去... 公忠  
去... 公忠  
去... 公忠

異本... 轉身自在...  
去... 公忠  
去... 公忠  
去... 公忠









明月。借問誰家婦。訝道何樓切。一問一靈巾。低眉竟

不談。とつる。す。か。ひ。け。る。よ。か。

人乃まれをうねる。八葉露。心。寒。に。け。感。概。聖。ま。れ。は。空。の。か。ま。い。侍。多。く。又。公。忠。れ。名。譽。く。

と。よ。め。り。た。れ。は。い。と。あ。ま。く。め。く。ま。り。たり。

さ。こ。も。り。科。し。か。ま。を。う。か。め。ひ。て。都。り。髪。乃。く。ま。る。ら。ぬ。さ。ぞ。ぞ。ぞ。と。つ。く。ま。せ。と。茶。

な。も。や。ら。ぬ。と。樂。夫。よ。る。鸚。鵡。洲。り。と。ま。ら。ん。く。女。れ。

歌。法。と。も。と。や。り。の。ま。夜。涙。似。真。珠。双。と。墮。つ。

異。が。き。り。り。れ



